

はじめに

動詞構文の議論においては、基本動詞が重要な役割を果たしている。例えば、Goldberg(1995)は、動詞構文の観点から注目すべき基本動詞として以下の5つを指摘している。

- go (自動詞移動構文)
- put (使役移動構文)
- make (結果構文)
- do (自動詞・他動詞構文)
- get (receive, have, take 等にみられる他動詞構文)

今、これらの動詞のうち、put に注目してみたい。ただし、Put から「使役移動構文 (the caused motion construction)」一般へと広げるのではなく、put が VOL (verb + object + location) の構文をもつことに鑑みて、「動詞 + 名詞 (設置対象) + 前置詞句 (設置場所)」となる構文ネットワークについて考えてみたい。その種の構文を導く動詞群を想定するとすれば、それは「何かをどこかに位置づける (設置する)」という意味合いの動詞群になるはずである。これを構文ネットワークとして学習・指導のユニットとして捉えるというのが、ここでのねらいである。動詞や構文をそれぞれ個別に学ぶのではなく、構文 (とその構文的意味) という観点から複数の動詞を相互に関連づけて学ぶことのメリットが感得されれば、そのねらいは果たせたことになる。

設置構文の中核としての PUT

まずは、「設置構文」の中核をなす動詞である PUT を使った表現例をみてみる。

1. Put a skillet on the stove. (フライパンをコンロにかけて)
2. She put eye drops in my eyes. (彼女は私の目に目薬を差した)
3. Can you put this haiku into English? (この俳句を英語に訳せますか)
4. That would put you into trouble. (そうすると君は困ったことになるよ)

これらの例文では、Put する対象の具象性には程度の差があるし、また、それらを位置づける「設置場所」にしても、具体的な場所から、抽象的な領域までの広がりがみてとれる。ただ、いずれにせよ、put の＜何かを動かしてどこかに位置づける＞というコアを文脈に応じてあてはめていけば、柔軟に解釈が可能となるものである。ここで改めて、共通する PUT の意味合いを確認すると、PUT : ＜何かを動かしてどこかに位置させる＞となる。そこから、

仮に put A 前置詞 B という構文においては、「何を」「どこに」PUT するのが問題となっているのであり、必然的に、位置させる「対象」と位置させる「場所」の情報に相応の意識が向けられるということになる。

PUT 構文のポイント

- ・ PUT する対象 → [名詞]
ex. a book, eye drops, a haiku, etc.
- ・ PUT する場所 → [副詞／前置詞句]
ex. on the shelf, in my eyes, into English, etc.

PUT の構文を理解したり発話したりする際には、「何を」「どこに」位置させるのかという点に意識を向けて行うことが大切である。そこで、その点に意識を向けて、声に出して発声するという訓練を想定するとすれば、以下のようなものが考えられる。

指示：「何を」PUT するのか（名詞）、「どこに」PUT するのか（前置詞＋名詞）に注目しながら、声に出して読んでみよう。

- 1'. **Put** [a skillet] **on** [the stove].
- 2'. She **put** [eye drops] **in** [my eyes].
- 3'. Can you **put** [this haiku] **into** [English]?
- 4'. That would **put** [you] **into** [trouble].

他の設置動詞への応用

この put の用法を、put 系の設置動詞にも応用したらどうか。put 以外の「位置づけ（設置）」の意味合いをもつ動詞には、例えば set, hang, fix, lay, park, install, bury などがあげられる。これらの動詞についても、設置対象（名詞）と設置場所（前置詞句）に注意を払って、用法をみることができる。これらの動詞は、位置づけ（設置）のニュアンスはそれぞれ異なっている（語彙的な意味の特性がある）としても、「対象をどこかに位置づける」という意味合いで共通している（構文的な意味が一貫している）のである。

以下、「設置動詞＋設置対象（名詞）＋設置場所（前置詞句）」の構文で、set, plant, bury, lay, install の例をあげてみよう。ここでも、「何を」「どこに」位置させるのかに意識を向けて読む訓練などを行えば、設置構文の共通した意味を確認することによって、これらの複数の動詞を相互に関連づけながら学ぶのに役立つであろう。

●設置動詞＋設置対象（名詞）＋設置場所（前置詞句）--- 構文的意味に焦点をあてて

5. She **set** [the candle] **on** [the table].
6. I **planted** [strawberries] **in** [the field].
7. The dog **buried** [the bone] **in** [the ground].
8. Please **lay** [your books] **on** [the desk].
9. He decided to **install** [a telephone] **in** [his room].

次に、「何を」「どこに」という点を踏まえて、それでは「どのように設置するのか」という設置のありように意識を向ければ、構文共有の意味を前提に、今度は、動詞固有の意味合いに意識が向けられることになる（つまり、同一構文の中で、動詞の使い分けの原理を知ることになる）。

●設置動詞の使い分け --- 「設置」のありようを動詞で表す

SET：何かを「(定められたところに) 位置づける」。

e.g. She **set** the candle **on** the table. (彼女はテーブルの上にろうそくを据えた)

PLANT：「植物」を地中に「植える」。

e.g. I **planted** strawberries **in** the field. (イチゴを畑に植えた)

BURY：何かを地中に「埋める」。

e.g. The dog **buried** the bone **in** the ground. (その犬は骨を地面に埋めた)

LAY：何かを平に（水平に）おいて動かさない。

e.g. Please **lay** your books **on** the desk. (本を机の上に置いてください)

INSTALL：「機械」を「備えつける」、「アプリ」を「インストールする」。

e.g. He decided to **install** a telephone **in** his room.

(彼は部屋に電話を設置することにした)

おわりに

このような例をあげる際には、ヴィジュアル情報も加味して、「設置対象」と「設置場所」の相性の原理から、前後に出現する情報について予測を行ってみるなどの活動や学習の方法も考えられる。それを理解や発話の活動に応用することも可能である。今回、扱ったのは、「設置構文」であり、それを受容する「設置動詞」という小さなカテゴリであった。しかし、このカテゴリで「設置」という行為を表象する構文の感覚がつかめれば、それはやがて、「動詞＋名詞＋前置詞＋名詞」によって表わされる、「使役移動構文」全般を獲得することにつながっていくはずである。例えば、上には取り上げていないが、hang my coat on the hook, fix a clock on the wall, park your car in the parking lot, hide a knife under the sleeveなども類推可能な表現となっていくと思われる。

大事なことは、すべてを網羅的に学習項目としてカバーすることではなく、いかにして典型

的な用例群を相互に関連づけて学ぶか、そしてその学びがより大きな言語使用の領域に自然と拡張していくきっかけを作るかという点にある。その意味で、今回扱った、動詞構文のうち、put を中心とする「設置構文」は、動詞構文におけるネットワーク学習のよい例となりうるのではないかとと思われる。